

顎関節のスクリーニング検査の必要性

塚原 宏泰

一般社団法人 日本顎関節学会 理事



<略歴>

- 1989年 日本大学松戸歯学部卒業
- 1989年 東京医科歯科大学歯学部第2口腔外科
- 1998年 東京都千代田区に塚原デンタルクリニック開院
- 2002年 歯学博士
- 2004年 医療法人社団宏礼会設立
- 2004年 東京医科歯科大学歯学部附属病院客員臨床教授
- 2012年 日本大学松戸歯学部兼任講師
- 2012年 神奈川歯科大学非常勤講師
- 2013年 行徳 TM 歯科医院継承開業
- 2018年 日本顎関節学会理事

日本口腔外科学会、指導医・専門医

日本顎顔面インプラント学会、指導医

日本顎関節学会理事、指導医・専門医

塚原デンタルクリニック院長

抄録

国民皆歯科健診制度の導入は2025年を目指しており、現在その枠組みと歯科検診項目の選定を議論中である。その中に顎関節の検査項目を導入することは、国民の健康を維持するために重要であると考えられる。

平成28年度歯科疾患実態調査における顎関節の状況は、口を開け閉めした時にあごに音がするかの質問に20~24歳の41.7%が「はい」と答え、痛みがあるかという質問には、20~59歳で5.2~13.9%が「はい」と答えている。一般的に顎関節症の罹患率は高く、進行性の疾患ではないが、顎関節症発症初期での対応によって症状の慢性化を防ぐことが可能となる。また顎関節と関連する筋群は、咀嚼をする上での起点となる器官であり、障害があれば高齢者における顎関節脱臼や成長期における咀嚼機能の低下にも大きく影響する。

国民皆歯科検診においては顎関節の検査項目は誰でも簡便で正確に実施できる必要があるため、日本顎関節学会は簡易的にスクリーニングできる検査の必要性を提案したい。